

1.鳥取橋遺跡第1次発掘調査報告

1. はじめに

今回の発掘調査は、一般国道482号道路新設改良事業(丹後弥栄道路)に伴い、京都府建設交通部の依頼を受けて実施したものである。

鳥取橋遺跡の周辺は、竹野川とそこに合流する鳥取川や奈具川によって形成された沖積低地が広がっており、現在、水田が営まれている。この沖積低地は東西1～1.5kmほどの広さがあるが、北側と南側の旧町界付近ではやや狭くなる。鳥取橋遺跡はこの幅が広がった沖積低地のほぼ中央部に位置する。1961年、堤防の基部あたりで縄文時代晩期ないし弥生時代前期と推定されるほぼ完形の小型壺1点が表採されたことから、散布地として認知された^(注)。また、地元の方のお話しによると、河川敷でも多くの土器を表採できるという。今回は、竹野川左岸の水田上に上記道路が計画されたことから調査に至ったもので、鳥取橋遺跡としてははじめての調査となる。

調査期間中は、京都府教育委員会、京丹后市教育委員会、京丹后市弥栄市民局をはじめとする関係諸機関、また弥栄町和田野・木橋・鳥取・井辺の各地元自治会からご教示・ご協力をいただいた。また、発掘調査および整理作業には多くの調査補助員・整理員・作業員の方々に参加いただいた。本報告は筒井が執筆した。

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

調査担当者 調査第2課主幹調査第3係長事務取扱 石井清司

同 調査員 筒井崇史

調査場所 京丹后市弥栄町和田野車田、井辺森山ほか

現地調査期間 平成22年5月12日～7月6日

調査面積 850㎡

2. 調査経過

鳥取橋遺跡周辺ではこれまで調査が行われたことがなく、遺跡の実態が知られていないため、まず、調査対象地内に7か所のトレンチを設置して、遺構・遺物の広がり等を確認することとした。

1～7トレンチは、それぞれ長さ15m、



第1図 調査地位置図および周辺主要遺跡分布図
(国土地理院 1/50,000 網野・宮津)

幅8mである。各トレンチからは、後述するように、遺物の出土はみたものの、顕著な遺構を検出することはできなかったが、比較的遺物が多く出土したトレンチを拡張して遺構の検出に努めた。さらに、1～4トレンチの間の空間が広いので、各トレンチの間に、新たに長さ10m、幅5mのトレンチを3か所に設定して調査を実施した(8～10トレンチ)。以上の結果、最終的な調査面積は850㎡となった(第2図)。

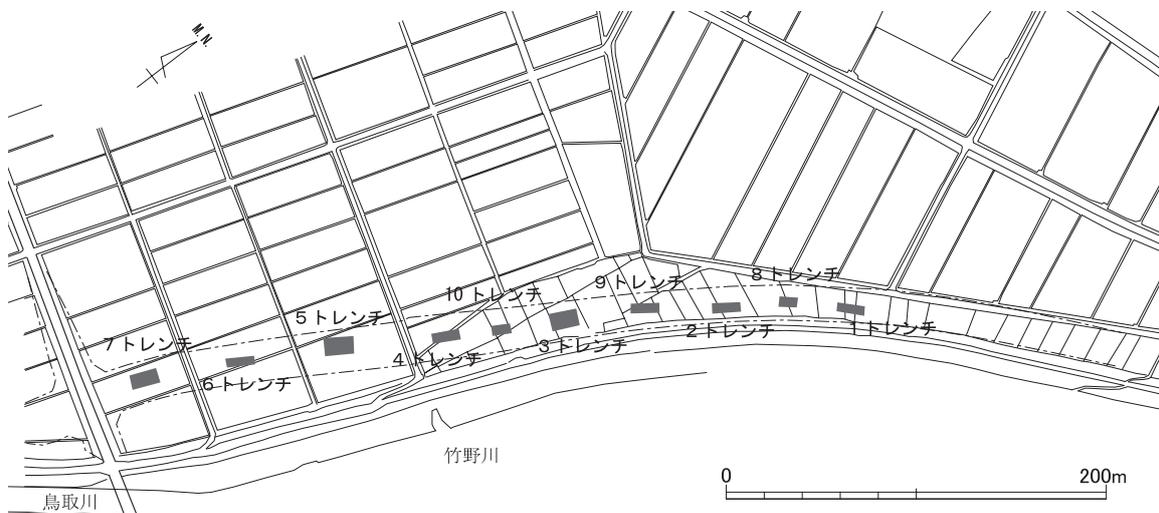
調査は平成22年5月12日から重機によるトレンチの掘削を開始した。調査にかかる作業はおおむね6月末までに終え、7月6日まで図面作成などの記録作業を行い、同日すべての機材を撤収し、調査を終了した。なお、調査期間中の6月25日にはラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。

3. 検出遺構(第2～5図)

1トレンチ 調査対象地内の最も北に位置する。表土下約2mまで掘削したが、遺構面や遺物の出土は確認できなかった。そこで、トレンチの北端部で断ち割りを行ったが、断ち割り内でも遺構面は確認されなかった。トレンチ内の土層は、表土からおよそ1.2mまでは現在およびそれ以前の耕作土の堆積層(1～7層)、その直下に洪水砂の可能性のある茶黄色細砂層(8層)が認められた(第3図)。その下層には湿地状を呈する堆積層(11～13層)が認められ、その下層(標高10.2mより下)には河川堆積と思われる砂層や粗砂層、小礫層が認められた(14～16層)。河川堆積層から弥生土器や白磁などが出土した(第6図1～4)。

8トレンチ 1トレンチの南20mに位置する。表土下約1.7mまで掘削したが、遺構面などは確認できなかった。そこで、トレンチの北端部で断ち割りを行ったが、下層でも顕著な遺構面は確認できなかった。

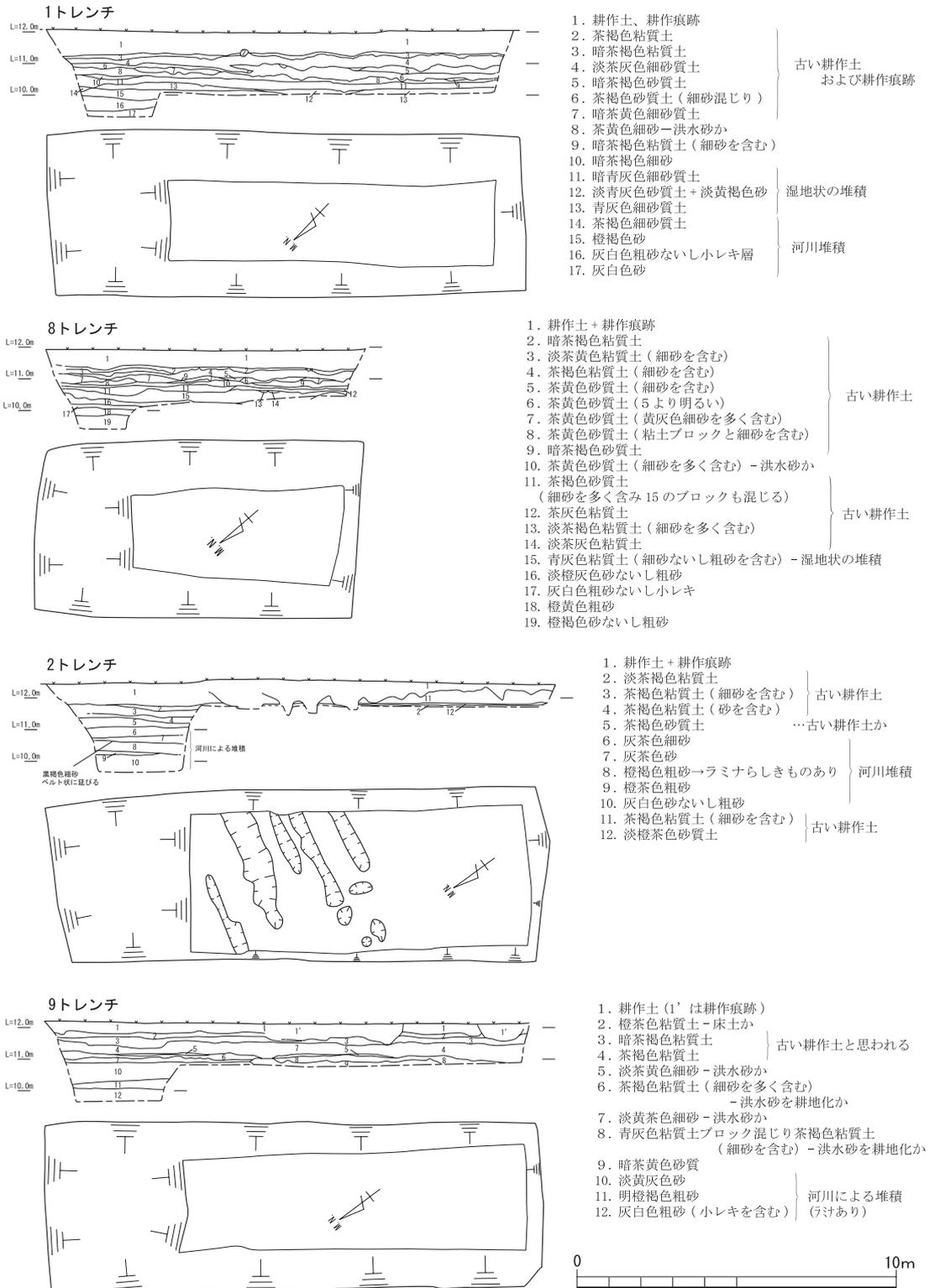
トレンチ内の堆積土層は、表土からおよそ1.3mまでは、現在およびそれ以前の耕作土の堆積層(1～14層)である(第3図)。このうち10層は細砂を多く含み、洪水砂の可能性はある。耕作土堆積層の下層には湿地状を呈する堆積層(15層)が認められる。その下層(標高10.3mより下)には



第2図 調査トレンチ配置図

河川堆積と思われる砂層や粗砂層、小礫層が認められた(16~19層)。河川堆積層から土師器や瓦質土器などが出土した(第6図5・6)。

2トレンチ 8トレンチの南20mに位置する。表土下約0.9mで、やや安定した地層(2層)を確認した。この上面で遺構検出をした結果、近・現代以降の耕作に伴う溝群を検出した(第3図)。



第3図 各調査トレンチ平面図・土層断面図(1)

また、トレンチの北端部で断ち割りを行ったが、この下層では遺構面を確認できなかった。

トレンチの堆積土層は、表土からおよそ1.3mまでは、現在およびそれ以前の耕作土の堆積層(1～5・11・12層)である。その下層(標高11.0mより下)には河川堆積と判断される細砂層や粗砂層が認められた(6～10層)。8層にはラミナ状の堆積痕跡がみられた。河川堆積層から弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器などが出土した(第6図7～11)。

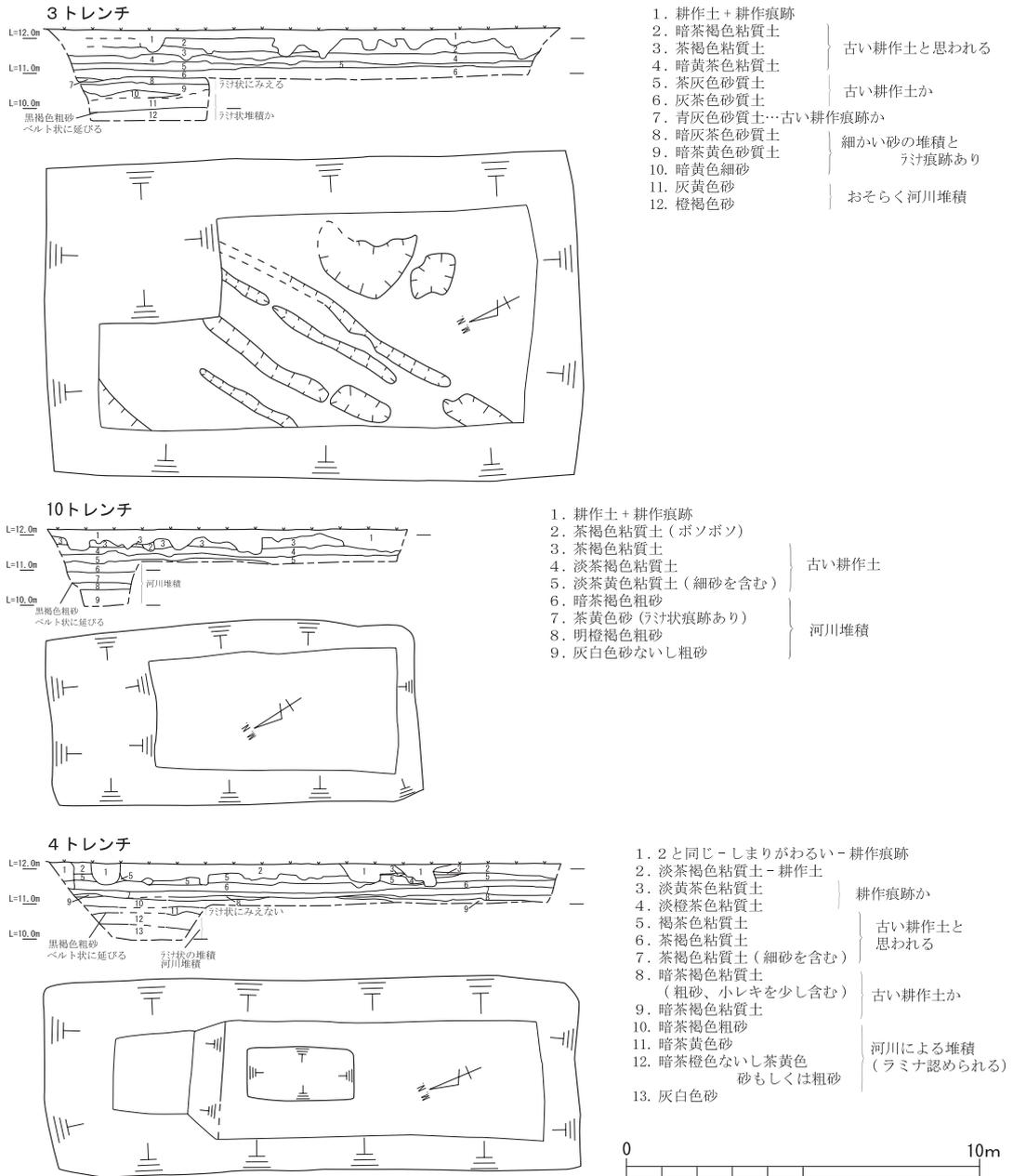
9 トレンチ 2 トレンチの南27mに位置する。表土下約1.4mまで掘削したが、遺構面は確認できなかった。そこで、トレンチの北端部で断ち割りを行ったが、顕著な遺構面は確認できなかった。トレンチ内の土層は、表土からおよそ1.2mまでは現在およびそれ以前の耕作土の堆積層(1～9層)で、洪水砂と思われる細砂を含む層が認められた(第3図)。それらの下層(標高10.9mより下)には河川堆積と思われる砂層や粗砂層が認められ(10～12層)、いずれもラミナ状の堆積痕跡がみられた。河川堆積層から土師器などが出土した(第6図12～14)。

3 トレンチ 9 トレンチの南27mに位置する。表土下約1.5mまで掘削したところ、2 トレンチと同様、やや安定した地層(6層)を確認した(第4図)。そこでトレンチの幅を10mまで拡張し、この上面で遺構の検出に努めた結果、調査地周辺が耕地化した後の、耕作に伴う溝や小規模な落ち込みなどを検出した。時期はおおむね近世と推定される。また、トレンチの北端部で断ち割りを行い、土層の観察を行った。表土からおよそ1.4mまでは、現在およびそれ以前の耕作土の堆積層(1～7層)である。それらの下層(標高10.9mより下)には河川堆積と思われる砂質土層や砂層が認められた(8～12層)。河川堆積層から土師器・須恵器・青磁・白磁などが出土した。(第6図15～18)

10 トレンチ 3 トレンチの南20mに位置する。表土下約1.0mまで掘削したが遺構面等は確認できなかった。その後、トレンチの北端部で断ち割りを行ったものの、顕著な遺構は確認できなかった。トレンチ内の土層は、表土からおよそ1.0mまでは、現在およびそれ以前の耕作土の堆積層(1～5層)である(第4図)。その下層(標高11.2mより下)には河川堆積と思われる砂層や粗砂層が認められた(6～9層)。河川堆積層から弥生土器片などが出土した(第6図19)。

4 トレンチ 10 トレンチの南16mに位置する。表土下約1.3mまで掘削したが、遺構面等は確認できなかった。その後、トレンチの北端部で断ち割りを行ったが、下層でも顕著な遺構面は確認されなかった。トレンチ内の土層は、表土からおよそ1.2mまでは現在およびそれ以前の耕作土の堆積層(1～9層)である(第4図)。その下層(標高11.2mより下)には河川堆積と思われる砂層や粗砂層が認められた(10～13層)。河川堆積層から遺物はほとんど出土しなかった。

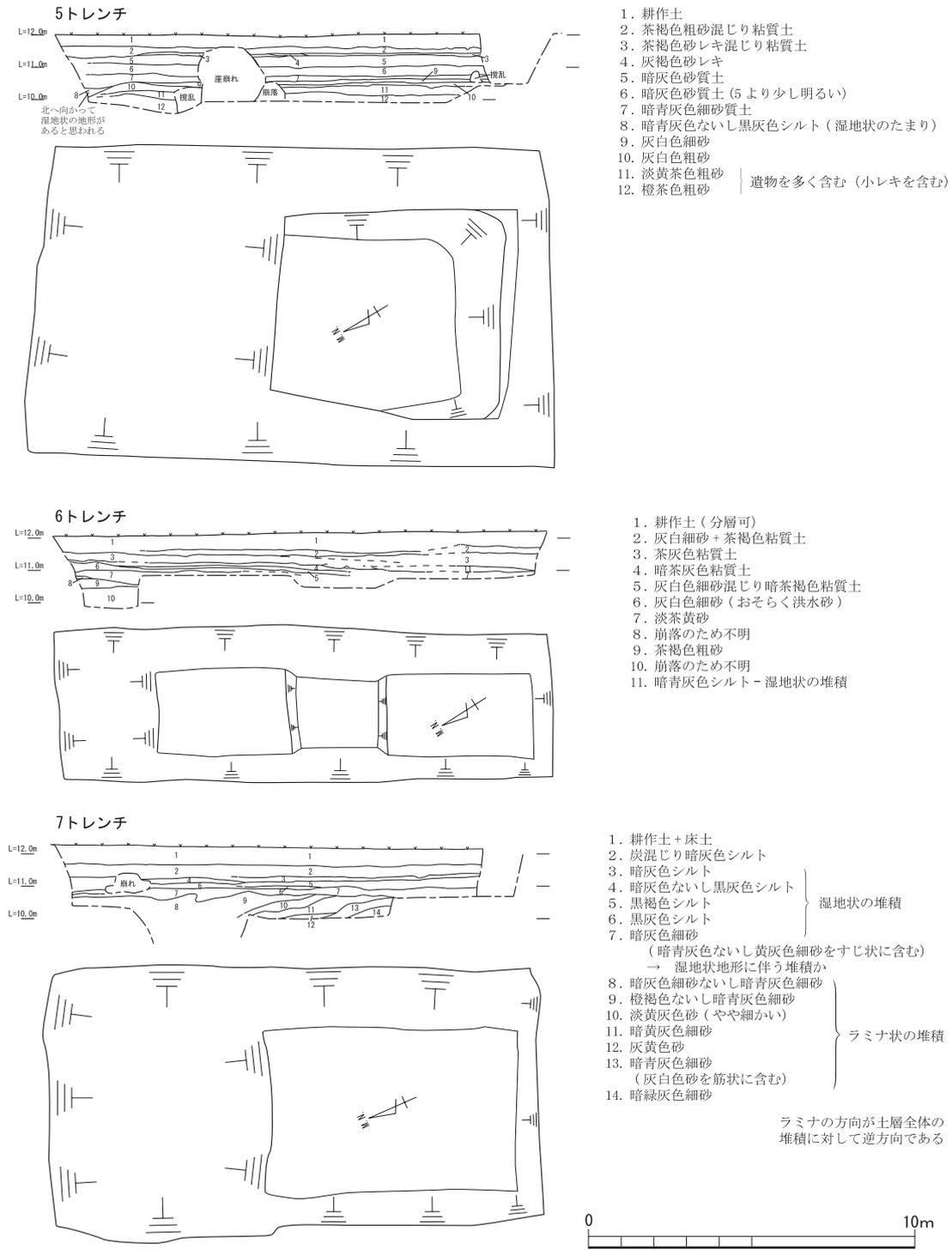
5 トレンチ 4 トレンチの南41mに位置する。表土下約1.6mまで掘削したが遺構面等は確認できなかった。その後、トレンチの北端部で断ち割りを行った。その際、10層ないし11層より弥生時代の遺物の出土が確認されたため、調査区の幅を10mまで拡張して、人力による掘削に切り替えた。その結果、遺物は河川堆積層と思われる砂層や粗砂層(9～12層)から出土していることが判明した。5 トレンチでは人力によってこの河川堆積層の掘削を行い、最終的な深さは表土下2.2mまで達したものの、顕著な遺構は確認されず、遺構面を確認することもできなかった。



第4図 各調査トレンチ平面図・土層断面図(2)

トレンチ内の堆積層は、表土から1.5mまでは現在およびそれ以前の耕作土の堆積層(1~7層)である(第5図)。その下層(標高10.5mより下)には河川堆積と思われる細砂層や粗砂層が認められた(9~12層)。また、調査区の北端で湿地状の堆積層と思われる暗青灰色ないし黒灰色シルト層(8層)を確認した。河川堆積層からは、弥生土器・土師器・須恵器・白磁・青磁などが出土した(第6図20~第7図38)。

6 トレンチ 5 トレンチの南37mに位置する。表土下約0.5mで、やや安定した地層(3層)を確認した(第5図)。この上面で遺構検出に努めた結果、近・現代以降の耕作に伴う溝群を検出した。さらに表土下約1.5mまで掘削したが、遺構面は確認できなかった。その後、トレンチの北端部で断ち割りを行った。この断ち割り内でも顕著な遺構面は確認されなかった。



第5図 各調査トレンチ平面図・土層断面図(3)

トレンチの堆積土層は、表土からおよそ1.0mまでは現在およびそれ以前の耕作土の堆積層(1~5層)である。その下層は、トレンチの北半部では洪水砂と思われる灰白色細砂(6層)が、南半部では湿地状の堆積と思われる暗青灰色シルト層(11層)が認められた。これらの下層(標高11.0mより下)には河川堆積と思われる砂層や粗砂層などが認められた(7~10層)。河川堆積層から弥生土器や土師器などが出土した(第7図39・40)。

7トレンチ 6トレンチの南36mに位置する。表土下約1.6mまで掘削すると、8層ないし10

層から遺物が出土したため、トレンチの幅を8mまで拡張して遺構の検出に努めた。結果的に遺構は確認できず、遺物は河川堆積層と判断される砂層や粗砂層(8～14層)から出土した(第5図)。5トレンチと同様、人力によって河川堆積層の掘削を行い、深さは表土下2.2mまで達した(標高10.0m)。最終的にトレンチの北端寄りで断ち割りを行い、下層の堆積土層を確認したが、土層の観察では顕著な遺構面を確認できなかった。

トレンチ内の土層は、表土からおおよそ1mまでは、現在およびそれ以前の耕作土の堆積層(1・2層)である。その下層は0.5～0.7mほどの厚さの暗灰色や黒灰色のシルトや粗砂が認められた(3～7層)。湿地状の堆積層と思われる。さらにその下層に河川堆積と思われる砂層や細砂層が認められた(8～14層)。これらのうち標高10.0～10.7mに見られる10～14層はやや締まった細砂層で、近接して安定した地層が存在した可能性が高い。このことは、10～14層を中心に多数の弥生土器が出土したことから裏付けられ(第7図41～59)、近くに弥生時代の遺構が存在した可能性が高い。このほかに砥石なども出土した(第7図60)。

4. 出土遺物(第6・7図)

今回の調査で出土した遺物は整理箱で3箱である。以下、トレンチ毎に出土遺物を述べる。

1 トレンチ(1～4) 1～3は弥生時代前期の土器である。1は壺の体部片で、肩部に2条の沈線が確認できる。2は甕の口縁部から体部にかけての破片で、沈線を5条施し、2条目と3条目の沈線の間に竹管文を密に施す。3は壺の底部と思われ、外面にミガキを施す。4は白磁の小椀の口縁である。中世のものである。

8 トレンチ(5・6) 5は土師器の小皿、6は瓦質土器の羽釜である。中世のものであろう。

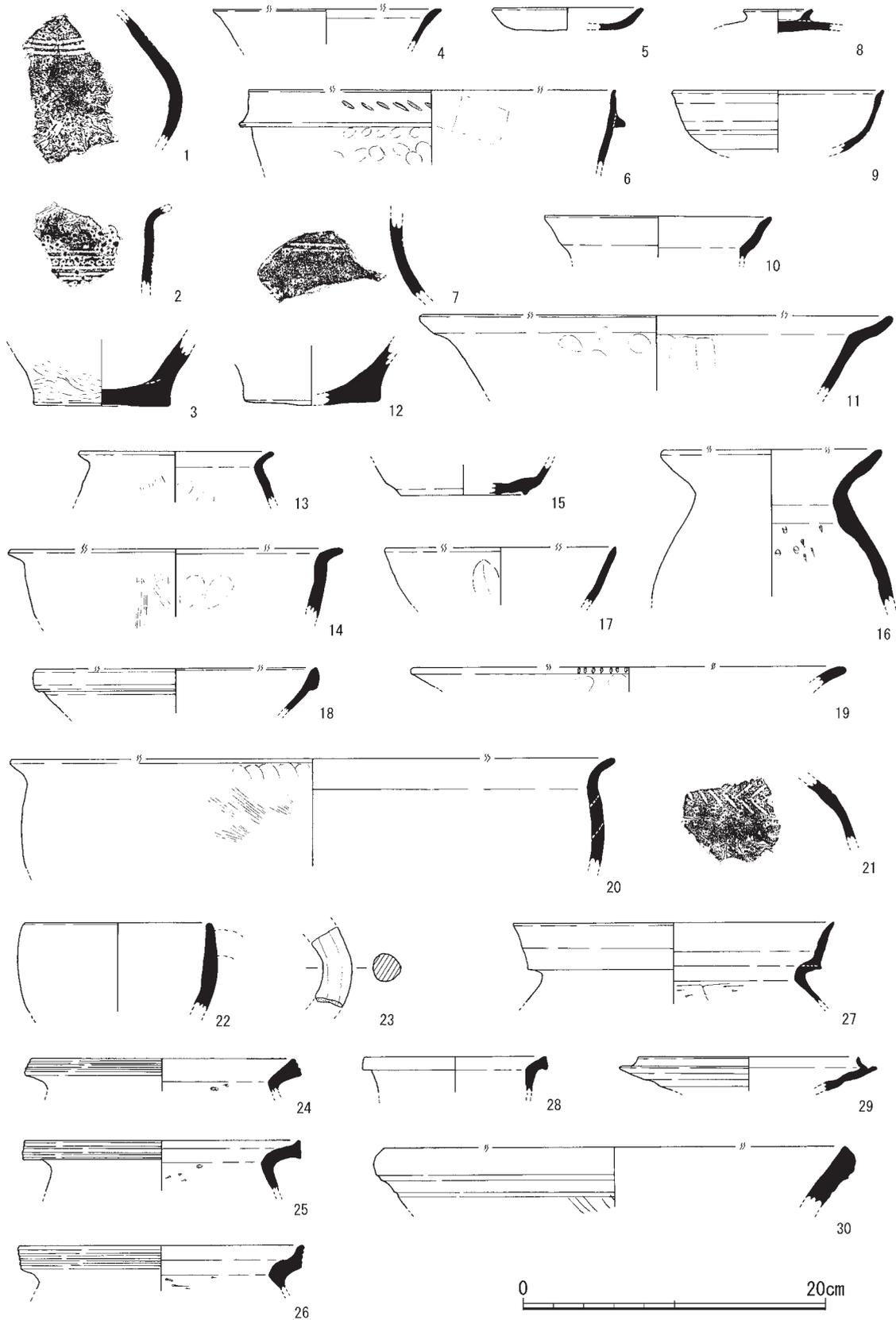
2 トレンチ(7～11) 7は弥生土器で、壺の頸部から肩部にかけての破片である。沈線を2条施す。弥生時代前期のものであろう。8は須恵器蓋の環状のつまみで、奈良時代のものである。9は須恵器の無蓋高杯の杯部の破片である。10は土師器の壺ないし甕の口縁部である。9・10は古墳時代のものである。11は中世の瓦質土器の鍋である。

9 トレンチ(12～14) 12は弥生土器の底部である。13は土師器の甕で、古墳時代のものであろう。14は弥生土器の鉢であろうか。

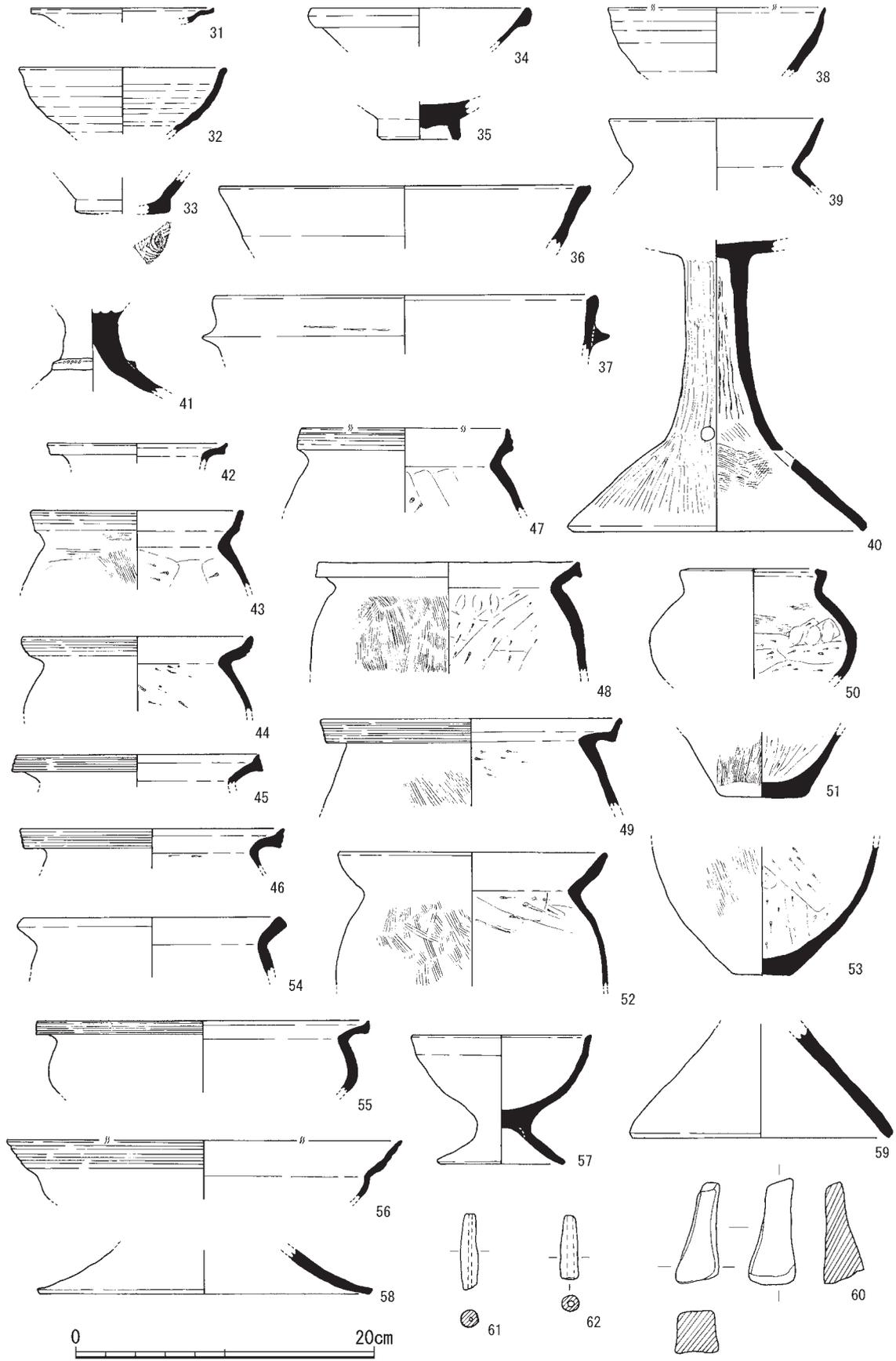
3 トレンチ(15～18) 15は高台付の須恵器杯である。奈良時代のものであろう。16は土師器甕である。体部内面にヘラケズリ調整を施す。古墳時代のものであろう。17は青磁椀である。外面に蓮華文がみられる。18は玉縁状の口縁を有する白磁椀である。17・18は中世のものである。

10 トレンチ(19) 19は前期の弥生土器の甕の口縁部である。口縁端部外面に刻み目を施す。

5 トレンチ(20～38) 20～26は弥生土器で、20・21は前期、22・23は中期、24～26は後期と思われる。20はやや大型の甕である。21は壺の体部片で、綾杉状の刺突文を施す。22は把手付の鉢、23は水差しの把手と思われる。24～26はいずれも甕で、口縁部外面に擬凹線文を2～4条施す。27は山陰系の複合口縁を呈する土師器甕である。28は口縁端部を外方に屈曲させる土師器短頸壺の口縁部と思われる。27・28は古墳時代前期に位置づけられる。29は須恵器杯、30は須恵器甕の



第6図 出土遺物実測図(1)



第7図 出土遺物実測図(2)

破片である。30は外面に沈線と刺突文を施す。29・30は古墳時代後期に位置づけられる。31はいわゆる「て」の字状口縁を呈する土師器皿である。32・33は須恵器椀で、33は底部外面に糸切り痕がみられる。31～33は平安時代中頃のものであろう。34は白磁椀の口縁部、35は青磁椀の底部、36は陶器鉢の口縁部、37は瓦質土器の口縁部、38は天目茶椀の口縁部である。34～38は中世前半から後半にかけてのものとして位置づけられる。

6 トレンチ(39・40) 39は土師器の口頸部である。古墳時代のものであろう。40は高杯の脚部である。外面にミガキ調整を施す。円形の透孔を穿つが、数は不明である。底径19.4cm、残存高19.8cmである。

7 トレンチ(41～60) 41は脚部に刻み目を施した突帯を有する。42は受け口状を呈する壺の口縁部と思われる。43～47・49はいずれも口縁部が複合口縁ないし受け口状を呈するもので、口縁部外面に擬凹線文を施す甕である。

48は口縁部外面に擬凹線文を施さない甕である。50は口縁端部が斜め上方に少し肥厚する短頸壺である。51は甕の底部であらう。42～51はおおむね弥生時代後期に位置づけられよう。52はゆるやかに複合口縁状を呈する甕である。53は甕の底部であらう。54は短い口縁部を有する甕または鉢であらう。55は鉢もしくは高杯の杯部と考えられる。口縁部は受け口状を呈し、外面に擬凹線文を施す。56は高杯の杯部で、浅い鉢状を呈する。口縁部外面に擬凹線文を施す。57は杯部が椀形を呈する高杯である。口径11.8cm、器高8.8cmである。58・59は高杯の脚部である。60は砥石である。

その他の遺物 61・62は土錘である。いずれも出土地点は不明である。

5. まとめ

今回の調査は鳥取橋遺跡ではじめての調査で、上述のように多数の遺物が出土したものの、顕著な遺構を確認することはできなかった。各トレンチにおける土層の堆積状況はおおむね似通っており、現地地表下1.5～1.8mまでは茶褐色系の粘質土で、耕作に伴う堆積層と考えられる。その下部には砂・粗砂・小礫を主体とする堆積層がみられ、竹野川の河川堆積層と判断される。この河川堆積層から多数の遺物が出土した。これらの遺物は時期的に、弥生時代前期から中世末にかけてのものと考えられ、調査地点の周辺にこれらの時期の遺跡が広がっていることが予想される。

1961年に表採された小型壺の時期(縄文時代晩期～弥生時代前期)まで遡るものは今回の調査では確認できなかったが、小型壺が表採されたのは今回の調査地点よりも上流側ということなので、より上流側に縄文時代にさかのぼるような遺構・遺物の広がりがあるのかもしれない。

注 岡林峰夫「鳥取橋遺跡」(『京丹後市史資料編 京丹後市の考古資料』京丹後市 2010)

圖 版



(1) 調査前全景(南西から)



(2) 調査地全景(北東から)



(3) 調査地全景(南西から)



(1) 1 トレンチ全景(南西から)



(2) 1 トレンチ土層断面(北西から)



(3) 8 トレンチ全景(北東から)



(1) 8トレンチ土層断面(北西から)



(2) 2トレンチ全景(南西から)



(3) 2トレンチ土層断面(北西から)



(1) 9トレンチ全景(南西から)



(2) 9トレンチ土層断面(北西から)



(3) 3トレンチ作業風景(北東から)



(1) 3トレンチ全景(南西から)



(2) 3トレンチ土層断面(北西から)



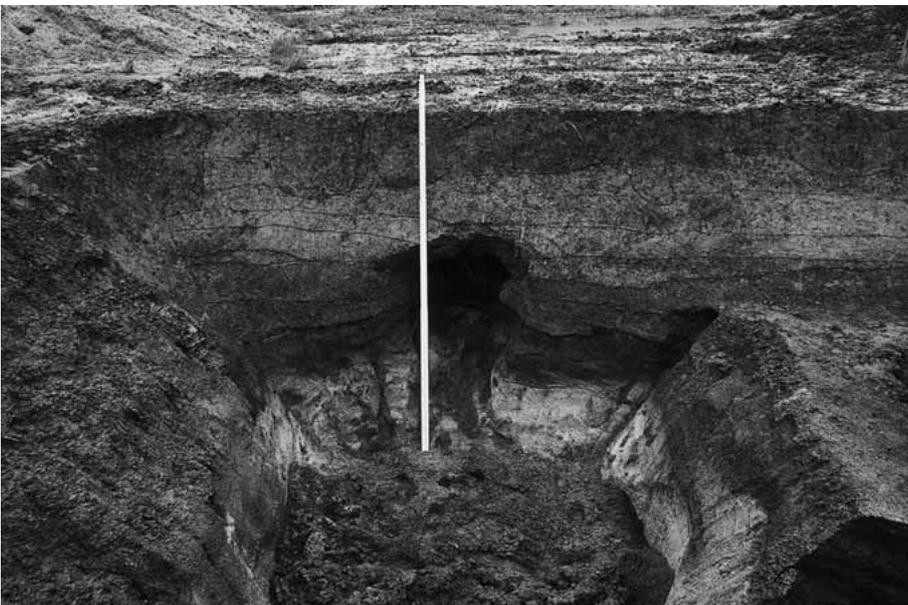
(3) 10トレンチ全景(南西から)



(1) 10トレンチ土層断面(北西から)



(2) 4トレンチ全景(南西から)



(3) 4トレンチ土層断面(北西から)



(1) 5 トレンチ作業風景(南から)



(2) 5 トレンチ全景(北から)



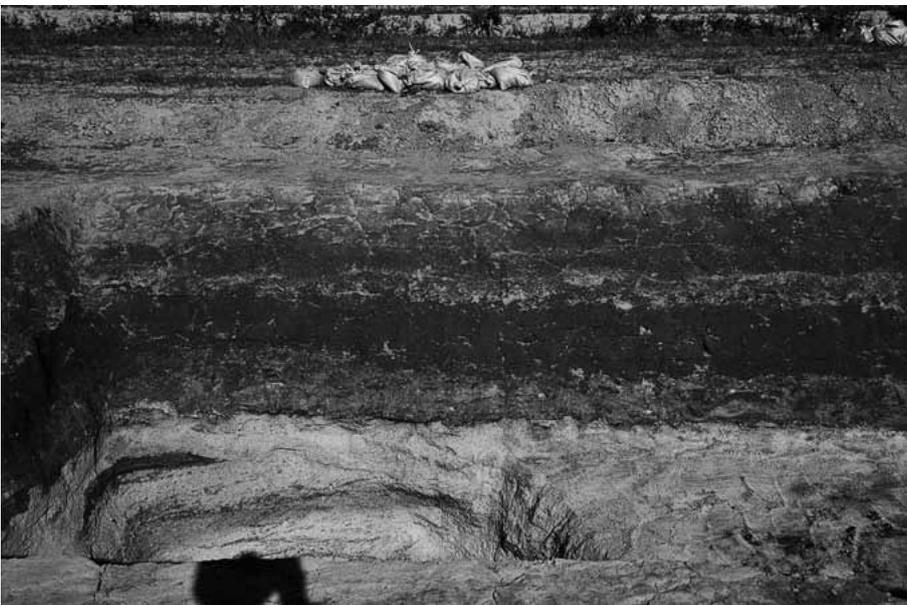
(3) 5 トレンチ土層断面(北西から)



(1) 6トレンチ上層全景(南西から)



(2) 6トレンチ全景(南西から)



(3) 6トレンチ土層断面(北西から)



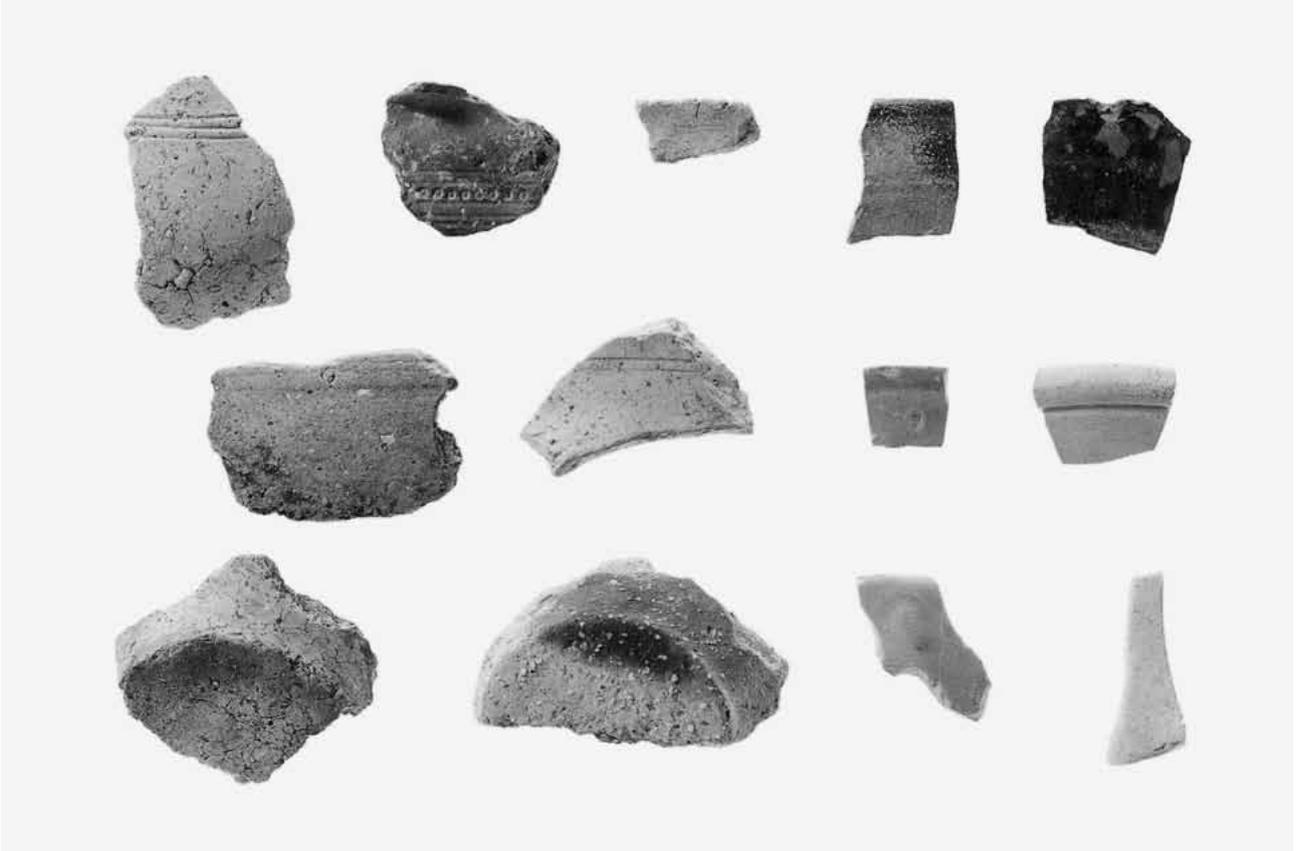
(1) 7トレンチ重機掘削(北から)



(2) 7トレンチ作業風景(北東から)



(3) 7トレンチ土層断面(南東から)



(1)出土遺物 1



(2)出土遺物 2